

第7章 オバマ氏訪問後の広島の問題

東海 右佐衛門直柄

五月二七日——この日は、歴史的な意味を持つことになるかもしれません。オバマ米大統領が広島を訪問した日です。その評価をめぐり、被爆地では今もさまざまに意見が割れていることは事実です。

肯定的にみる人たちの意見を要約すると、次のようなものになると思います。広島と長崎に原爆を投下した国の現職大統領が、被爆地に初めて立ち、原爆慰霊碑に献花すること自体、これまで考えられなかったことだ。訪問自体に、重い意義がある。

一方、否定的な見方はどうでしょう。平和記念公園の滞在が一時間足らずであったこと、被爆者の証言をすっかり聞く時間が設けられなかったこと、さらに核兵器のない世界への

明確な道筋が語られなかったことなどから、「訪問は物足りず、大きく評価すべきではない」という意見だと思えます。

今回、あらためてオバマ大統領の訪問とその背景について解説し、分析を加えます。そして、そこから被爆地の今後の課題について考えたいと思います。

1 オバマ氏の演説

ハイライトの一つは、オバマ大統領が献花し、平和記念公園が静まりかえった「瞑目の五秒」ではないかと思えます。

私は当日、公園内で取材をしていました。周りには国内外から約六〇〇人もの報道陣がいました。取材場所が規制されていたために、現場で三時間程度、待機していました。

オバマ大統領は午後五時三九分ごろ慰霊碑に近づき、献花をした後、下を向いて神妙な面持ちで目を閉じました。その時間、五秒……。このとき、辺りの空気が一変したのが分かりました。

七一年前にこの地で何が起きたのか、どんな惨劇があったのか。大統領は慰霊碑の前でしずかに思いを馳せていたのだと思います。じつとうつむく表情と時間がそれを表してい

たような気がしました。

続いてオバマ氏は被爆者たちを前に演説をしました。振り返りつつ、主なポイントについて考察します。

第一のポイントは、非常に哲学的な表現がちりばめられていたことです。冒頭は「七一年前、雲一つない明るい朝、空から死が落ちてきて、世界は変わった」。推敲を重ねたであろう、詩的な文章で始まりました。そのほか「物質的な進歩や社会の革新が、真実からわれわれの目をくらませることがどれだけ多いことか。気高い名目のため、暴力を正当化することはどれだけ容易か」など格調高い表現が多くありました。

第二に、被爆地に寄り添った表現が多かったのもポイントです。「一九四五年八月六日の朝の記憶を風化させてはならない」「きのこ雲のイメージが、われわれに人類の根本的な矛盾を想起させた」などです。事前の予想通り、「謝罪」の文言はありませんでしたが、被爆地で突然平穏な暮らしを奪われた市民について心を寄せる表現が目立ったことは重要です。

第三に、広島原爆の犠牲者を「一〇万人以上」と表現したことも注目されます。この点は、六月一日付『中国新聞』に広島市立大の井上泰浩教授が指摘されています。従来、米国は広島犠牲者について「七万人」としてきました。これにより、「東京空襲より被害は

少ない」「レニングラード包囲戦の比ではない」と原爆被害を矮小化する材料として用いられてきたことは否めません。一方、広島市による原爆死者数は「一九四五年一二月末までに約一四万人」です。今回、米国側も一〇万人以上と、被害規模が相当にあったことを認められた形といえます。

2 演説から見えた課題

演説から見えた「課題」についても考えたいと思います。

私が注目したのは、広島・長崎の原爆被害を、広い「人類の戦争の歴史」の中でとらえたことです。太古の昔より、世界には戦争が起り続け、甚大な被害が及んできた。その一つが広島・長崎であった。戦争を防ぎ、なくす努力を続けなければならない——というのが演説の主な論点でした。

もちろん、そうした文明論的な視点から戦争を否定し、紛争の平和的解決を訴えることは重要です。

ただ、原爆被害を、その他の一般戦争とひとくくりにしてしまうことは、核兵器の持つ特殊性を薄めてしまう危険性もあると考えます。

現在、核兵器を廃絶しようという動きが広がっている背景は何でしょう。それは、生物・化学兵器や対人地雷、クラスター弾のように、核兵器が極めて非人道的だということでもし再び使用されてしまえば、無辜の市民を巻き添えにしてしまう。その破壊性、無差別性、放射線影響の深刻さ、地球規模の環境破壊……。そうした他の兵器と比べものにならない非人道性を持つ核兵器は、通常兵器とは区別をし、すぐに禁止しなければならぬ、という考えなのです。

それなのに広島・長崎の惨禍を、「戦争の歴史の一断面」ととらえることは、核兵器の持つ特殊性を曖昧にして、戦争一般の被害の中に溶け込ませる危険性をはらむ、と考えます。つまるところ、被爆地が望んできた、核兵器廃絶という肝心の部分が弱まり、戦争全体をなくしましょう、という抽象論に終わった感もあります。

また、核兵器廃絶への具体的ステップについてのビジョンを示すことありませんでした。これまでオバマ大統領は、プラハ演説などで、核兵器なき世界への「道義的責任」という文言を使ってきました。今回その道義的責任という言葉ありませんでした。オバマ大統領は核兵器なき世界をどう実現するのか、そのために世界はどう動くべきか。そうした具体的な道筋を聞きたいと思っていた人にとっては、演説はやや物足りなかったのは事

実だと思えます。

3 訪問後に判明した課題

訪問の後に、いくつか新たに判明した課題もあります。

第一に、「核のフットボール」の問題です。これは、米国の核ミサイルの発射ボタンが入った黒いかばんの俗称です。中には、大統領が核ミサイルを指令する機器や大統領の認証コードの機械が入っているとされ、常に大統領の近くに帯同されているようです。今回、オバマ氏の近くの大きな黒かばんをもった軍人が同行する様子がニュース映像で確認されています。

もし、慰霊碑の近くに米国の核ボタンが持ち込まれたのが事実であったなら、これほど原爆犠牲者を傷つける暴挙はないのではないのでしょうか。

米国側からすれば、大統領近くに核のフットボールを常に置くことは、緊急時に対応するための通常業務なのでしょう。それが核超大国の現実です。ただ原爆の惨禍で苦しみなくなった犠牲者が眠る慰霊碑の意味をどれだけ理解していたのか、疑問に感じます。

第二に、オバマ氏と被爆者の対話面会の意味合いです。オバマ氏は演説の後、被爆者で

あり歴史研究家の森重昭さんに近寄り、そつと抱き寄せました。涙を流す森さんの背中をさするオバマ氏の様子は、米国内でも繰り返し報道されました。被爆者とオバマ氏の「和解」を象徴するシーンとしてとらえられています。

ここでお伝えしたいのは、森さんは実は米国側の招待者だったという事実です。日本被団協の坪井直代表委員は日本政府側からの招待でした。つまり、米国人捕虜についての研究をしてきた森さんへ、オバマ氏が近づくのは事前に米側によって「予定」されていた可能性もある。米国側とすれば、「和解」を印象付けたい狙いがあったといわれても否定できないのではないかと思います。

4 オバマ氏の狙い

あらためてオバマ氏がなぜ広島訪問を決断したのかという背景についても、分析したいと思います。まず核問題をめぐるオバマ外交には三つのアジェンダがありました。

一つは核不拡散の取り組み。二つ目は、核セキュリティの強化。三つ目が「核兵器なき世界」への道筋です。

まず核不拡散については、オバマ政権はイラン核問題で一定の成果を上げました。イラ

ンはかつて、「悪の枢軸」と呼ばれ、核武装する危険性が指摘されてきました。しかし、イランは、保有する濃縮済みウランと濃縮に使う遠心分離機を減らすことで二〇一五年、欧米など六カ国と合意しました。今なお行く末には課題があります。ただ外交手段で、核開発の進展を食い止めたことは大変重要です。

二つ目の核セキュリティ問題についても、オバマ氏は核安全保障サミットを開いてきました。核問題をめぐっては、核兵器だけではなく、医療用や原発由来の放射性物質をどう安全に保管・管理するかも重要です。テロの危険性が増す中、各国が結束して管理を徹底させる枠組みを構築したことは意義があります。

三つ目の「核兵器なき世界」への取り組みはどうだったでしょう。ウクライナ問題から米国とロシアの対立が激しくなり、核軍縮の機運は急速にしぼんでいます。新戦略兵器削減条約（新START）も結ばれましたが、核軍縮は思うように進んでいません。爆発を伴う核実験を禁じる包括的核実験禁止条約（CTBT）も米議会での反対で批准されていません。プラハ演説でノーベル平和賞を受賞しながら、肝心の核軍縮が進展していないことから、オバマ氏に対して「口だけだ」という批判も強かったのです。だからこそ、オバマ氏は退任前に被爆地を訪れ、核兵器なき世界の実現をあらためて世界に訴えたのだと

思います。つまり、個人的なレガシー（政治遺産）のため、というのは否めないと考えます。

5 訪問の意義

オバマ氏の被爆地訪問について、さまざまな課題や問題点、背景分析を試みてきました。では今回の訪問を、私たちはどう評価すべきなのでしょう。

どの角度から光をあてるかによって、見方はさまざまに割れるかもしれません。たくさんの課題・問題点があったのは事実です。けれども私は、やはりオバマ氏の被爆地訪問の歴史的な意義は大きい、そしてその訪問は、被爆地が求める核兵器廃絶にとって重要であったと考えます。

理由の一つは、原爆投下国が核兵器の悲劇を認めたということです。米国が、核兵器がもたらす惨状について言及したことは、世界における核兵器の少しずつ認識を変えていく可能性があるほど、重要なことだと考えます。

二つ目の理由は、オバマ氏に続いて、核保有国の政治指導者が今後、広島を訪れる可能性が高まったことです。核保有国のトップが、核兵器の被害に触れることはこれまででありませんでした。それが核の非人道性への認識が保有国に届かない一つの要因にもなってい

ました。米国の現職大統領が被爆地を訪問したことで、これから保有国の政治中枢部にいる人たちが、原爆の実情を知る機会が増えると思います。

そして同時に今から被爆地は、あらためて原爆被害のむごさ、非人道性を世界に伝える好機を迎えていると思うのです。

6 被爆地の課題

オバマ大統領が広島を訪れてから、その後の被爆地の状況はどうだったでしょうか。

オバマ氏訪問の直後、共同通信社が全国電話世論調査を実施しました。この調査で、オバマ氏広島訪問について「よかった」と回答した人が九八%にも達しました。

九八%というのは、驚くべき数字です。ここまで世論が一方に偏るのはほとんどないことだと思えます。そのほか、原爆慰霊碑前にオバマ氏の献花を見に市民が多数訪れたこと、原爆資料館の入館者が、急増したことなどがニュースとして報じられています。

私は正直、少なからぬ違和感も持っています。

もちろん、オバマ氏の被爆地訪問によって、広島への関心が高まったことは非常に意味があります。原爆資料館への入館者が増えて、被爆の実情を知ってくれる人が増えつつあ

るのはうれしい限りです。

でも一方で、少しはしゃぎすぎではないのか。オバマ氏の一步を、被爆地はどう引き継ぐのか。もう少し冷静に考えるべきだとも感じているのです。

被爆地はかつて、オバマ氏に熱狂したことがあります。二〇〇九年、オバマ氏がプラハ演説で核兵器なき世界を訴えたとき、広島では「オバマブーム」が起りました。オバマ氏を礼賛し、「核兵器廃絶をやってくれ」という声が高まりました。そしていつの間にか、被爆地は「観客気分」に陥り、オバマ氏に頼りすぎたきらいは否めないと思います。

かつてのオバマブームの二の舞になつてはならない、と思うのです。オバマ氏は二〇一七年、退任します。「オバマさんが広島に来てくれて良かった」で終わっては、オバマ氏退任後、被爆地の運動は袋小路に陥りかねません。

いまこそ、被爆地として、核兵器廃絶に向けた新たな戦略が求められていると思うのです。これまで被爆地は主に、日本政府と、核超大国である米国に照準を合わせ、廃絶を訴えてきた傾向があります。今後は運動をもっと多角化し、核兵器禁止条約へ向けた動きを主導しているノルウェーやオーストリア、スイスなどの連携を強め、新たな国際キャンペーンを展開することも一案だと思えます。

被爆者の方々が高齢化しています。何としても存命中に廃絶を成し遂げてほしい、というのが被爆者の訴えです。その悲願達成に必要なことは何か。それは被爆地からの新たな行動だと思うのです。

同時に、私たち市民一人一人にも問われているのではないでしょうか。オバマ氏はプラハでこう演説しました。「核兵器を使用したことがある唯一の核保有国として、米国は行動する道義的責任がある」。この「道義的責任」は、被爆地に住む私たち一人一人にも、投げかけられているのかもしれませんが。

もうオバマ氏任せではいけない。「観客気分」になるのではなく、私たち自身の課題としてもっと向き合いたい。オバマ氏訪問を機に、私たちも「道義的責任」を胸に刻み込むこと。それこそがオバマ氏訪問後の私たちの宿題ではないかと考えています。